



京傳戲作

享和癸亥發行
 華橋上通油街
 仙鶴堂梓行

人間萬事吹矢の上
みんなんのまじ

仙鶴堂

予あるひ一日芝しんめい神明の御社みやしろに詣で、偶吹矢ふきやの店に佇たずみて、一觀せしに、吹息ふくいきの長きはたえずして、しかも實まことの的まとにあたらずねらひに歪ゆがむ手のうちの、且やはづれ且八つあたりして、一つも思ふつぽならず。金時を出さんとして化物いなかを出し、朝比奈を出さんとして鬼を出す。千疊敷の家形やかたは變なじて奈良なら綠青ろくしやうの山となり、張貫はりぬきの岩は齧ひろがへりて淺黃木綿の波幕となる。其かはること速き、光陰の矢かといふかる。一心の矢あり、禍福の的あり。善惡邪正じやしやうの人形あり、正にこれ三世せじんぐわ因果。十二因緣いんま縁の糸をひきて、もろくの正體をあらはすものなり。人生一代の光景ありさま、從來一箇六文ひとづつもんの吹矢の如し。猛然として發悟し、家に回りて這冊子このさうしをつくれり。

享和三年癸亥孟春

山東京傳述

印

一日は神明乃みやうふまうて。偶吹矢の店うまうて。一
 吹息のふまふまうて。老も實の的あう。物ひふ
 中ひ手ひもの。且うと且ひあうして。思ふはふふ大
 金賊の出えうて。化物と出。朝比奈と出えうて。鬼と出す。
 千疊敷の家形。変して奈良緑青の山あふ。張貫の岩と
 どりて。浅黄木綿の波幕あふ。其うと速き光隠の矢
 どりて。一心の矢あり。禍福の的あり。善惡邪正の形あり。正見
 三世因果。十二因縁の糸ひうて。多くの正體とあう。もの
 人生一代の光景。從來一箇六丈の吹矢うて。猛然うて。發
 悟し。家へ回て。這冊子とけうと。

享和三年癸亥孟春

山東京傳述



吹矢道具之圖

▲この吹筒は、たとへば、人の氣の如く長きもあり、短きもあり、兎角人はこの筒の氣が長くなければ心の矢、思ふ的へ當らず。

○筒と矢と氣と心と合體せねばならぬものなり。

▲この的へ心の矢が當ると善惡邪正、善きも惡しきも、それ〴〵の人形の正體あらはれ出づる。

外目で見れば、善も惡も的は皆同じやうにて、何の人

的

的

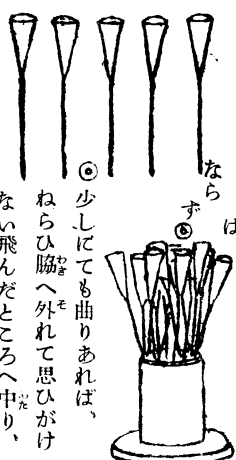
的

形が出るか知れねども、この的からは善が出る、この的からは惡が出る、といふ事は天道様はとうに御存じなり。これ人の心のはかり難きこと、この的と同じことなり。

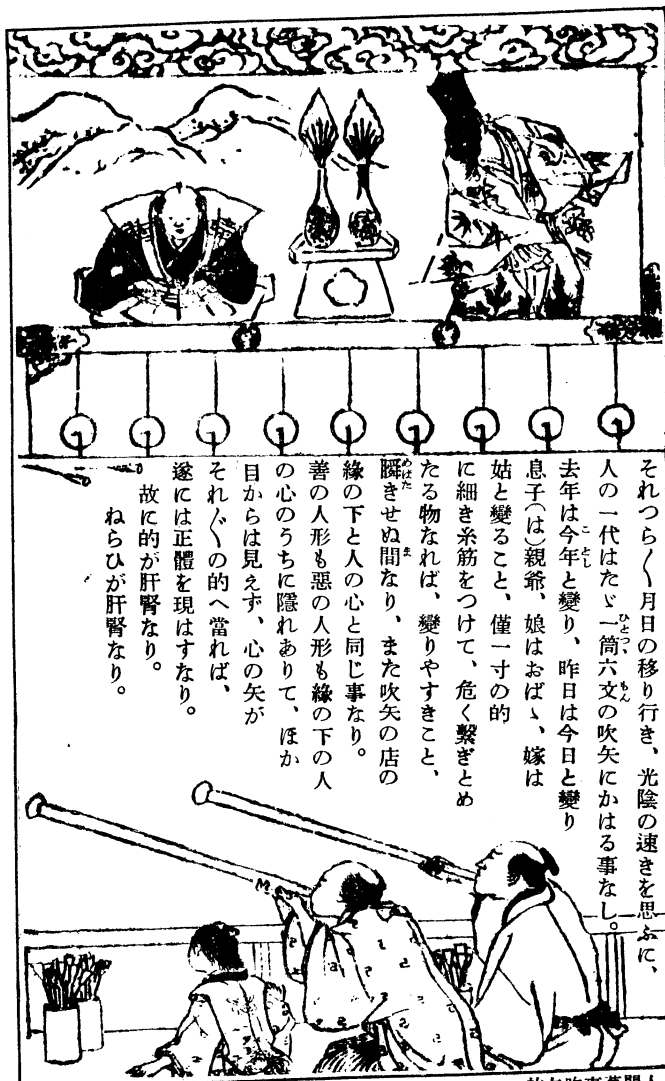
▲この糸は禍福
善惡を繋ぎとめて
おく因縁の糸筋なり。

▲吹矢の矢は人の心に
喩ふ。この心の矢、
如何にも眞直でなけれ
ば

人の口にあたる所に
金のはめてある。金
は人の口あたりよき
物なればなり。



⑤ 少しにても曲りあれば、
ねらひ脇へ外れて思ひがけ
ない飛んだところへ中り、
または何本も素矢を食つて空しく矢代ばかりを
とられ、まことの人形の形を見ることならず。
これ思ふ的へ當らねばなり。



それつらく月日の移り行き、光陰の速きを思ふに、
 人の一代はたゞ一箇六文の吹矢にかはる事なし。
 去年は今年と變り、昨日は今日と變り
 息子(は)親爺、娘はおば、嫁は
 姑と變ること、僅一寸的
 に細き糸筋をつけて、危く繋ぎとめ
 たる物なれば、變りやすきこと、
 瞬きせぬ間なり、また吹矢の店の
 縁の下と人の心と同じ事なり。
 善の人形も惡の人形も縁の下の人
 の心のうちに隠れありて、ほか
 目からは見えす、心の矢が
 それ(づ)の的へ當れば、
 遂には正體を現はすなり。
 故に的が肝腎なり。
 ねらひが肝腎なり。

人間萬事吹矢的



「野郎の鐵拐仙といはゞ云へ。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」



吹矢は息の長きが肝心、人は長生が専一なり。

人は長生が専一なり。



▲吹矢の的に當れば、ガツタリと音がして人形、姿を現はす、このガツタリは合多理と書きて、多く理を合はすとよむ。この雙紙も多くの理を合せて作る。これ合多理の謂なり。

憎ガツタリ可愛ガツタリも同じ道理なり。

「人がこの雙紙を見て

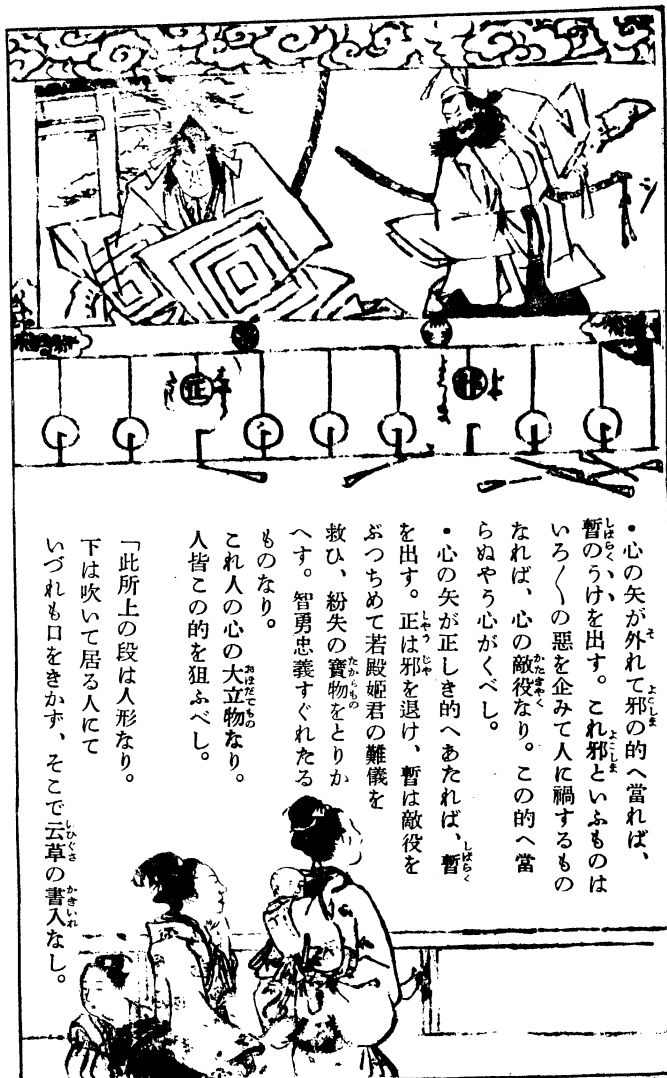
おかしガツタリ

うれしガツタリ

すればいゝが。」



問人萬吹矢的

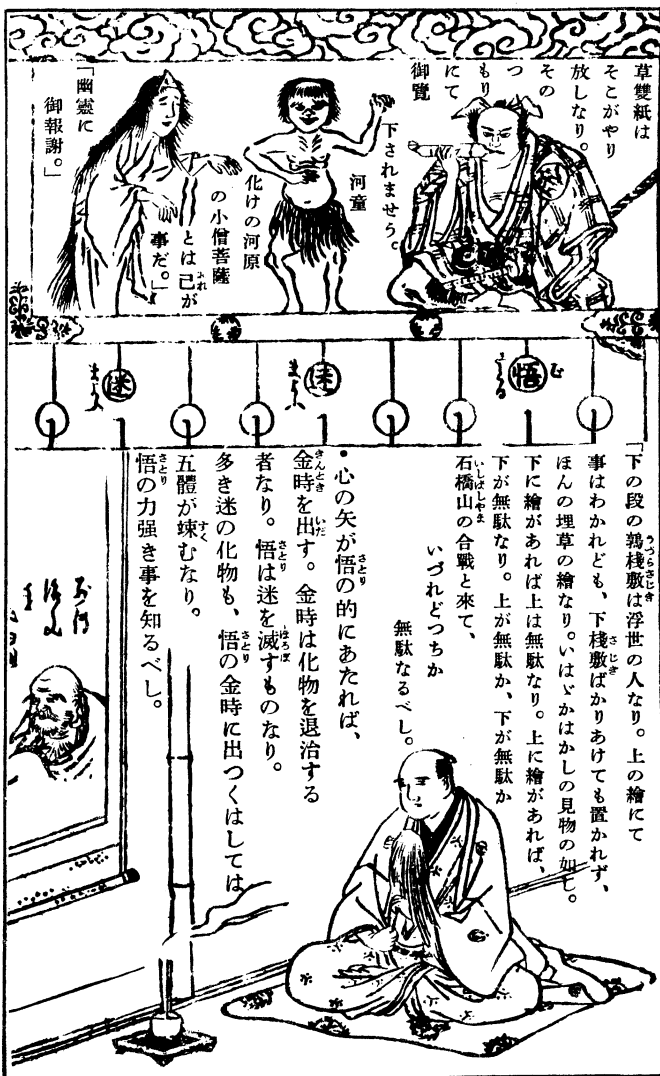


・心の矢が外れて邪の的へ當れば、
 暫のうけを出す。これ邪といふものは
 いろ／＼の悪を企みて人に禍するもの
 なれば、心の敵役なり。この的へ當
 らぬやう心がくべし。

・心の矢が正しきのへあたれば、暫
 を出す。正は邪を退け、暫は敵役を
 ぶつちめて若殿姫君の難儀を
 救ひ、紛失の寶物を取りか
 へす。智勇忠義すぐれたる
 ものなり。

これ人の心の大立物なり。
 人皆この的を狙ふべし。

「此所上の段は人形なり。
 下は吹いて居る人にて
 いづれも口をきかず、そこで云草の書入なし。





「にとはごや
この浦舟に

帆をあげ
てい

「なんと
己が顔は
こはからう
おや
いやはん
にや
捻方も
ねえ。」

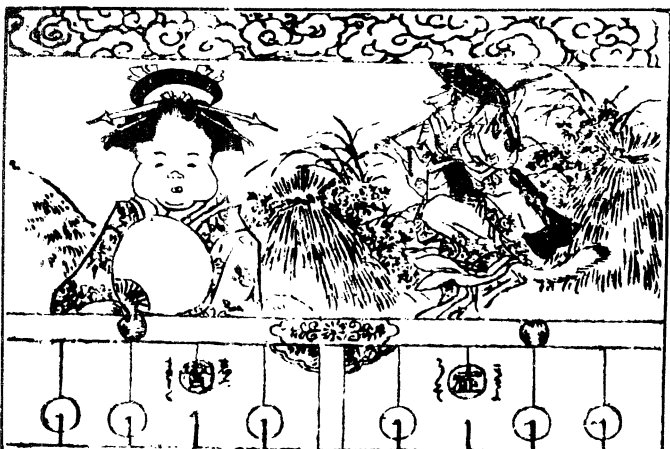
① ① ① ① ① ① ①
怒 と 喜

・心の矢が喜の的へあたれば、
大黒を出す。大黒天はいつでも
にこ／＼笑つてばかり居給ふ、
笑ふ門には福來るといふ、
家内中がつね／＼大黒
のやうににこ／＼さへして
居れば、家繁昌疑ひなし。
随分この喜の的を狙つて
心の矢をはづさぬやうに
すべし。

腹立怒るより、我と我身を
責めて、片時も安き心
なし。随分この的に
あたらぬやう心がくべし。

此喜怒哀樂
の四つの的
は人情の常
にて
生ある
もの
一日も
のがれ
難き
事な
り





・心の矢が虚^{うつ}の的^{てき}へあたれば、葛^{くわ}の葉^はの姿^{すがた}を出す。葛^{くわ}の葉^はは顔^{かお}は美^{うつく}しき女^をなれども心^{こころ}は畜^{ちく}生^{せい}にて、何^{なん}處^{ところ}ぞでは化^けの皮^{かわ}を現^{あらわ}はす美^{うつく}しき奴^{やつ}ほど、虚^{うつ}は多^{おほ}く實^{じつ}は少^{すく}きものなり
 油^{あぶら}断^{こと}すべからず。
 ・心の矢^やが實^{じつ}の的^{てき}へあたると、お多^{おほ}福^{ふく}を出す。
 心^{こころ}に實^{じつ}さへあれば、顔^{かお}はお多^{おほ}福^{ふく}でも不^ふ承^{しょう}すべし、不^ふ器^き量^{りょう}な女^をに結^{むす}句^く貞^{てい}女^を多^{おほ}し。



「その刀^{あかしもろか}は葵^{あひ}下^{しも}坂^{さか}でよつく切^きれます。それから御^ご覽^{らん}じませ。」

利^きの肝^{かん}心^{しん}なり。

鹿^かのあるが如^{ごと}し。又^{また}劍^{けん}に正^{せい}眞^{しん}あり。實^{じつ}と虚^{うつ}のある如^{ごと}し。これ目^め

「人の魂^{たましひ}は劍^{けん}なり。劍^{けん}によく切^きれるとなまくらあり。人に利^き口^{くち}と馬^{うま}

鹿めは何處へ行つた。
あいつまた奥山へ紅葉を
踏み分けに行き居つたか。
但し芥子之介をかはかし
か。ふくろくにうちに居め
には困るぞ。」

さてまた
次の蛸さかな
片手片足たもちます。
此儀を名づけて
天蓋ちやい。
どつと
ゆてたり。



「いもぐふの蛸もへき
昨夜寝ねえ
せい、いか、いも
くつてならねえ。」

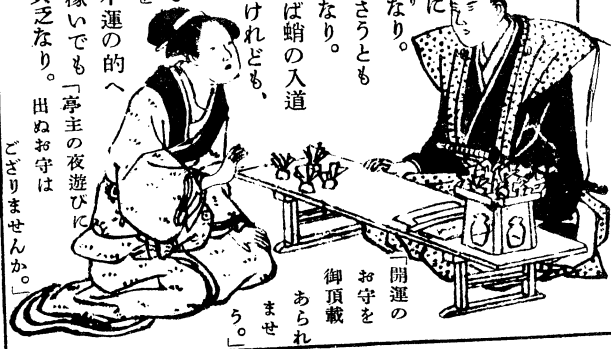
聞運佛子

・心の矢が運の的へ當れば
福祿壽を出す。

福祿壽の、おつむりは
延ばさうと思つて延びたるに
あらず。自然とのびたる頭なり。

人も運の的へ當れば、延ばさうとも
思はず、自然と金が延びるなり。

・心の矢が不運の的へ當れば蛸の入道
を出すなり。鯛、鯉は足なけれども、
立派に暮し、蛸は八本の
足あれども、口一つを養ひ
かねて岡へ上り、芋までを
掘喰ふ。人もその如く、不運の的へ
あたれば、たとへ八人前稼いでも「亭主の夜遊びに
やつぱり貧乏なり。出ぬお守は
ござりませんか。」



開運の
お守を
御頂戴
あられ
ませ
う。

・的矢吹事萬聞人



「その玉をとられては、まじき事なり。」

もう
龍王
がなら
ねえ。」

①

心

①

き

①

ん

・心の矢が仁の的へ當れば、龍王を出す。

龍王は龍宮の主なり。

人も家國の主となれば、仁心がなくてはならず。

・心の矢が義の的へ當れば、魚を出す。

魚は龍王の家來にて、よく玉を守護す。

これを守る玉は主人なり。よく守るは役目に怠らぬなり。

これを忠義の士に譬ふ。

「この五つは五常の的なり。皆人への目的をよく狙ひて一づすべからず。」

・心の矢が禮の的へ當れば、寶塔を出す。いかほどの名玉も、裸でゐては信仰なし。寶塔といふ着物を着せておけば、自ら尊く見える。これを人に喻へていはゞ、上は冠より下は羽織袴に至るまで





これは日輪月輪様だ。
饅頭の食ひかけと
思ふまいぞ。

門からおでた
鬼の舌

門々ぐわづ



・心の矢が目の的へ當れば、
日月を出す。人に目のあるは、

天に日月あるが如し。

天に日蝕月蝕あり。

人にも目のくれる事あり。

慾に目がくれ

子に目がくれる。

・心の矢が口の的へ當れば、
門ひらけて内より鬼を出す。

これ口は禍の門なればなり、

また口に惡を持つといふも、

人の口に戸がたてられぬといふも
この故なり。

この故なり。

・心の矢が耳の的へ當れば、
木鬼を出す。

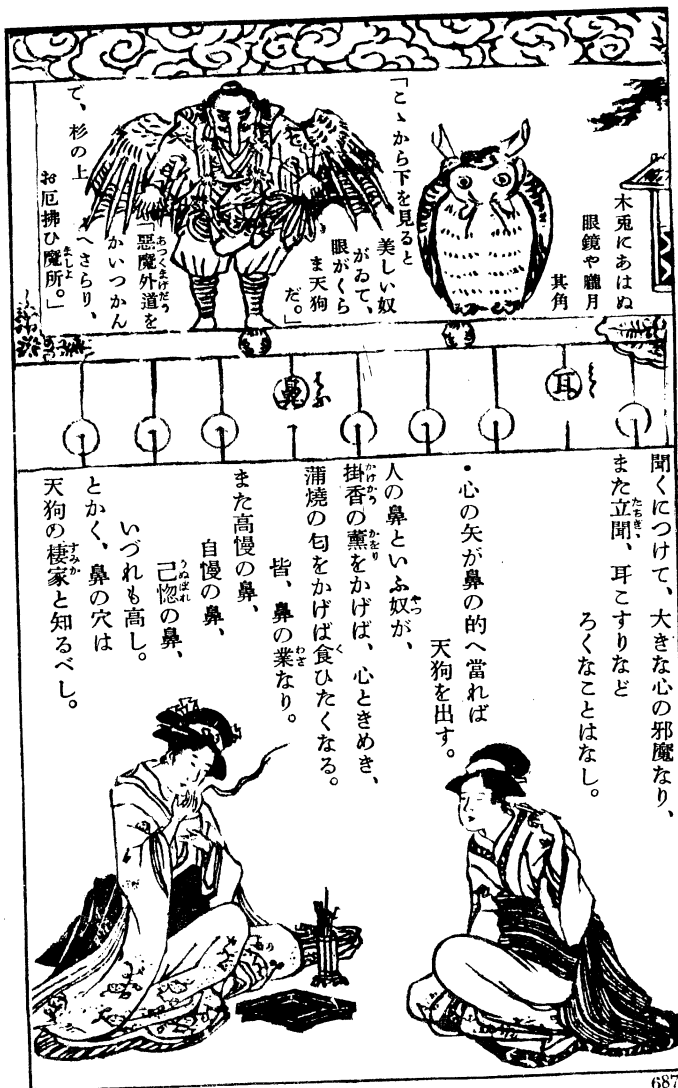
木鬼は耳の邪魔なる鳥なり、

人の耳も、よい事悪い事を



「いづれ
眼醫者
は様々
にある
が
中にも
わしが
療治は
奇妙だ。」

人問萬事吹矢的





此士農工商の四つは、人間
一生を送る渡世の的なり。

・心の矢が士の的
へ當れば、

鯉の瀧登りを出す。
これ士の立身出世は

鯉の瀧のぼりの如く
なればなり。

・心の矢が百姓の的へ當れば雷を出す。
これは耕作に精を出せば、天の恵にて、

日照にも、雨を降らせて、よく五穀を稔らす。

・心の矢が細工人の的へ當れば、
千疊敷の座敷を出す。

職人も精を出して
上手になれば、千疊敷

の大仕事も請合つて
大金を儲けるなり。

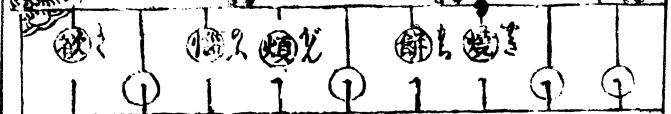
「この渡世の的をはづ
さぬやうに心がくべし。」



靡ぞ楽しむ。

・心の矢が商^{あな}的^なへ當れば
千兩箱を出す。
別して商人は常に代物^{しろもの}のよしあし、相場の
上り下りを考へて、商^{あな}的^なをはづさぬやうに
せねばならず。この的^{あな}へさへ當れば、
千兩箱のみにあらず、家倉^{いへくら}地面^{ぢめん}、
思ふ程のもの出でずといふ事なし。

「千兩箱を
出す糸は
細き利の
糸なり。
安賣^{やすう}て
なけれ
ば繁昌^{はんしょう}
せぬと
知る
べし。」



• 心の矢が焼餅の的へ當れば、
唐辛子を背負つた奴を出す。
唐辛子はその色赤く悋氣の胸の火
の如し。その形は角の如し。
戀の奴、この悋氣の
角の戀の重荷を背負
つて苦しみ、遂に夫に
愛想つかされ、追ひ出され
辛き目を見るなり。

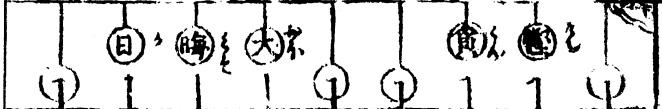
「花見より
月見より
から並べた
所はいゝ景
色だ。」

• 心の矢が煩悩の的へ當れば
犬を出す。

• 心の矢が欲の的へ當れば、
座頭を出す。欲には目の
見えぬものなり。

• 心の矢が慳貪の的へあたれば
鬼の念佛を出す。慳貪婆のお看經は
鬼の念佛と同じことなり。

「これを見てはもう堪忍なら
ねえ。」



的矢吹事萬間人



「短冊竹や〜
飾竹や〜。
「盆と正月と一緒に来
ては氣も違ふ筈だ。」

「か
たき
かたきとつけ
拍子で腹
む。」
「親の敵と
酒屋の借は
違えぬ〜。」

「句
にほひ
幽
反魂丹
御用なら
この間
なか〜
左様でござい。」



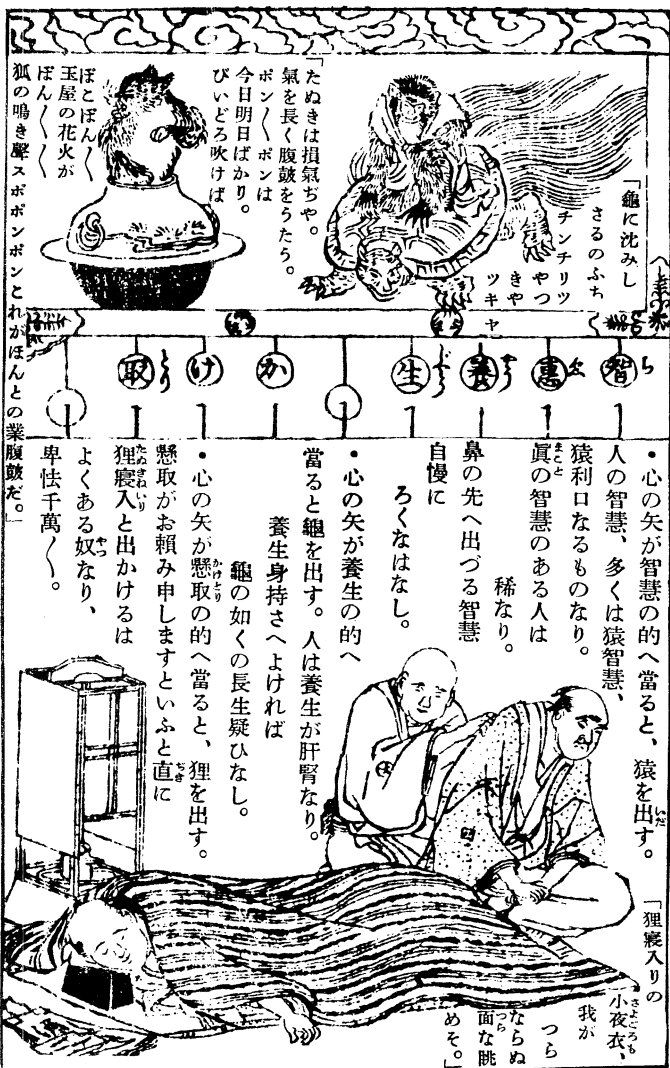
・心の矢が酒的^かへ當ると
狂女の人形を出す。
酒の一名を氣違水^{きちがみづ}といひて
人を氣違にする毒水なり。

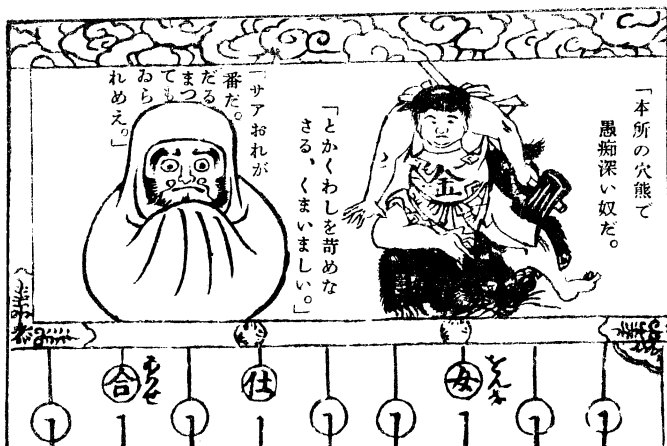
・心の矢が金的^{かね}的^{てき}へ當ると
敵討^{かた}の人形を出す。
金が敵の
世の中ぢや
金がなければ、
なんのいな。
とは定九郎が
金言なり。



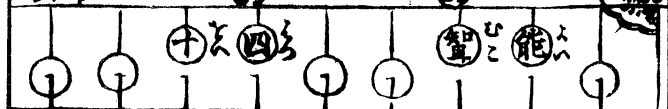
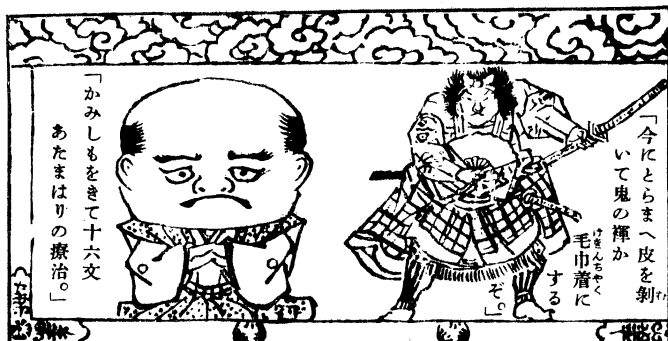
「狐を釣るな、チンチリ
ツ、ルツ
ルツ

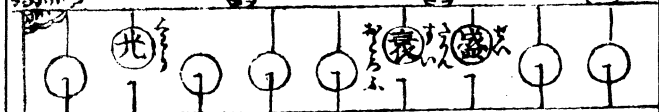
「氣ちげえを
釣ろな。」

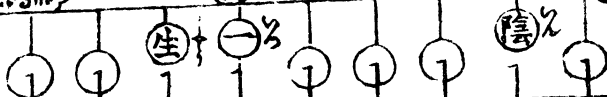












佛様は、地口
などは、おつ
しやらず。

「閻魔さん方、
亡者衆、地獄の中で
こなさんの。

「慳貪婆ア、何事も情を
張りし報にて
淨玻璃の鏡にうつる。



正直ちい翁いは
狐拳こけんをうつ
やうな
身を
して
居る。

「慳貪婆は
繼子を叱つ
て居る形
なり。
すわと云は
ば横ツ面を
握拳にぎりこぶしを膝
の上に拵へ
て待つて
居る
ところ。

心の矢が善の的へあたれば、極樂の態相を出す。惡の的へあたれば地獄の有様を出す。この地獄極樂は先の世にあるのみにあらず、有財餓鬼とて金持にも餓鬼の苦しみあり。我心の鬼、我身を責むる活地獄この世にあり。又たとへ貧しく暮すとも我身の足る事を知れば、生きながらの極樂なり。人間萬事心の矢を善の的へ外すべからず。これ人の一生は吹矢の如しといふ謂の締括りなり。

讀書九

清覺世道人傳方 一包十五粒入 代堂丸五分

○氣根を強くし物覺えをよくす。○心腎の虛分によし

○氣の方ふらゝ患ひによし。○常に身を使はず心を使ひて

心勞多き人、老若男女によらず、一週り用ゐて身に

覺ゆるしるしあり。○道中なされ候か、又は

病身の人は常に懷中に貯へべき藥なり。○氣鬱○酒の酔

○癢痞○腹痛の類、一粒にて即效あり。

委しくは能書に誌す。

▲賣弘所江戸

京傳店



さきの年、市川白猿
葺屋町の顔見世に
御最良の息で働く葺屋町
金時もあり
暫くもあり。

○矢の根五兩

玉磨かざれば光なし。玉といへども、なんぞ親爺の頭の如く磨かずして光るべけんや。心の矢の根も先づその如く、よく磨かざれば役に立たず。齒磨にて齒を白くする息子、洗粉にて衿を磨く娘は多けれども、心の矢の根を磨く人なく、錆だらけな心が澤山なり。心の矢の根を磨くには先づ堪忍が第一にて、堪忍五兩負けて三兩といへば、これを矢の根五兩と名づけて此半丁のおまけに添へて上ます。

も一つおまけに御披露あり。

當年も相變らず新切御

御進物御



革紛ひ紙御



疊入新型

縮緬蠟引御



大極上ふすべ紙御



新型御



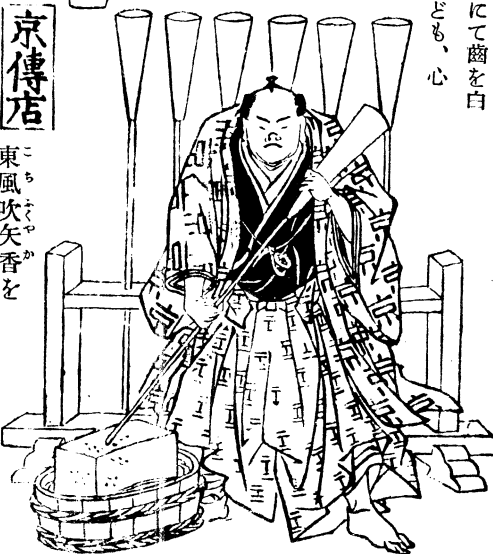
御提煙草入

御鼻紙入類 新切類 品々

京傳店

東風吹矢香を
射とめん梅の的

矢の字で切れぬ所が
めでたし



醒世老人
京傳戲作

的矢吹事萬門入